

ベートーヴェン・ピアノソナタ全曲演奏会を終えて

東誠三（ピアニスト、国際スズキ・メソッド音楽院教授）

本誌172号でも紹介した東誠三先生による「ベートーヴェン・ピアノソナタ全曲演奏会」がこの秋大団円を迎えました。ジュネーヴ国際音楽コンクール審査員としてスイス滞在中のお忙しい中、ご自身による思いを綴っていただきました。

福島県の三春町で2008年からスタートした、「ベートーヴェン・ピアノソナタ全曲演奏会」が、先日2012年9月16日に終了した。足掛け5年の長期にわたるシリーズを終えて、多くの方々との交流と様々な思いの詰まったその道筋を、振り返ってみたいと思う。

三春町との関わり

三春町は、東西に広がりを見せる福島県の、中央よりやや東に位置している。県庁のある福島市より南で、県の経済商業の中心地、そして交通の要衝でもある郡山から、磐越東線で20分、太平洋岸までなかなか起伏を持ちながら続くのどかな山合いの一角に位置している。三春町には、全国にその名を轟かせてい

るものがある。日本三大桜の一つである「滝桜」で、樹齢1000年を超える見事な枝垂れ桜の巨木は、その枝に咲き誇るやや白みがかかった桃色の花びらで、毎年多くの人々を魅了している。

この演奏会シリーズのそもそもの発端は、10年近く前まで遡る。当時進んでいた、街の中心部の再開発計画の中で、街の人々の様々な生活シーンの核となる施設として、建設が進められることになったのが「三春交流館」だった。その中に作られるホールの音響設計に、私の古くからの友人であり、東京フィルハーモニー交響楽団のコンサートマスターである、三浦章広さんが関わり、そのオープンングコンサートに三浦さんと訪れたのが始まりである。そして、その2年後

に、今度は、やはり長年に渡り演奏を続けてきた、「ボア・ヴェール・トリオ」（三浦さんとNHK交響楽団の首席チェロ奏者である藤森亮一さん）として、もう一度コンサートに伺った。「まほらホール」と名付けられたそのホールは客席数400人ほどのいわゆるシューボックス（長方形）型で、客席数に比較して広めに取られた空間が、楽器を選ばない質の良い残響を導き、室内楽やリサイタルには最適である。

申し分のないハード環境

ホールのピアノも、常に良い状態が保てる工夫が設計当初から折り込まれ、開館したあとも定期的な楽器の手入れが、きちんと行なわれていた。世界中のほと

んどのコンサートホールに備え付けられているのと同じ、スタインウェイD型のグランドピアノが、このホールにも設置されている。

ピアノという楽器は、例えばヴァイオリンやチェロといった弦楽器と違い、同じメーカーの同じ型のピアノであれば、外観上の相違は見取れないし、内部の機構も複雑な仕組みが寸分違わず組み立てられているので、個々の楽器の差はほ

んど無いと思われがちなのだが、実際は、それぞれの楽器によって、たとえば同じ型であっても、音にはかなり差が出るものである。実際に弦に触れる部分であるハンマーが、フェルトという有機物質でできていること、わずかな力のかかり方にも敏感かつ正確に反応するように、代々のピアノ製作者たちによって探求されてきたいわゆる「アクション」の調整の微妙な違い、そして共鳴体であるピアノ本体の状態などが相まって、2つとして同じ音が出てくるものはない。まほらホールのピアノは、本体もアクションも良い状態で作られたもので、楽器自体の持つ音の質は大変高いものだった。そうした、素晴らしい「ハード」を持つホールで、どんな企画ができるだろうか、と、心の中で夢を膨らませていたところ、たまたまトリオのコンサート後の懇親会で、ベートーヴェンのピアノソナタのシリーズができたなら良い、ということ将来の夢として、口にしたところ、ホールの運営協会の方々が前向きになってくださり実現した、という次第である。

素晴らしいソフトパワー

ここで、三春町特有のホール運営組織「三春交流館運営協会」について紹介したいと思う。今回のシリーズで表立って、そしてその何倍も目に見えない部分で支えてくださったのが、この交流協会の方々なのだ。三春交流館運営協会の事務局でもあり、基本的な企画の具体的な立案や対外的な折衝、広報の手配などを担当してくださった吉田淳子さんを中心に、街の住民である様々な職業、年齢の方々がボランティアとして参加し、それぞれの立場で必要な仕事を分担し、年に4〜5回開かれるまほらホールでのイベントをサポートし、成功に導くために力を尽くしてくださっている。そのチームワークと和気あいあいとした空気が、どれほどコンサートに来るお客様の気持ちと和やかにし、聴きやすい雰囲気を作り出しているか計り知れない。今回のベートーヴェンのシリーズでは、大半の作品が一般的なお客様には馴染みの薄い曲目であったこともあり、毎回のコン



2012年4月にはプライベートでも三春町を訪問。見事な「滝桜」のライトアップを町のみなさんと楽しんだ（写真提供：三春交流館運営協会）

ベートーヴェン・ピアノソナタ全曲演奏会を終えて

構成、盛り付けなどのプレゼンテーションの方法、そして口に入り一瞬にして嘔み砕かれて体の中へ消えて行く儚さ…。形は残らないが、上質のものに自分の感覚の奥深いところが接した時に残る記憶と、喜びの数々。食べることと聴くことの何と似ていることか…。その一瞬のために、作り手はすべての意識と感覚を常に研いでいかねばならないのだ。その結果として、受け取り手がどのように感じたかは、多くの場合明らかではない。ただ、そのように受け取ってくれると信じて作り上げていくしかない。



すべての意識と感覚を研ぎすませ、臨んだ
(写真提供：三春交楽館運営協会)

サートの1〜2カ月前に、次回の曲目の事前勉強会が開かれていた。そうした単なる広報を超えた真の意味での生涯学習の機会が、ごく自然に作られ実行されていたことに、小さくて穏やかな佇まいの街の底に流れる、人々の意識の深さと広さを窺い知ることができたのである。

決して楽ではない道のり

32曲あるベートーヴェンのピアノソナタの中で、それまでに演奏会や学生時代に取上げたことがあったのは約5分の3で、残りは初めて取り上げるものだった。これらを1年に2回のペースで連続させていくことが、かなりエネルギーを要するであろうことは予想していた。この曲目だけでなく、並行して他の演奏会も遂行しなければならぬし、日々の教育活動も疎かにできない。このシリーズを進めていくにつれて、日常生活パターンからどうやって無駄を省いていくかが、重要な命題になった。

ある曲を実際に演奏できる状態に仕上げて行くには、それなりの過程を経ている



ベートーヴェンと真正面から対峙した5年間だった
(写真提供：三春交楽館運営協会)

かなければならない。実はこの過程そのもの（別の言い方をすれば工程）は、どんな段階の、どんな能力の人にとつても変わらない。クレメンティのやさしいソナチネを仕上げるのも、30分を超えるような大曲のソナタを仕上げるのも、その本質は同じだ。習熟度が高ければ、省略できる工程が増えていく。その省略できる工程が、「身に付いている」ということなのだと思う。工程そのものは省略できても、意識の流れはしっかりその部分に通っていないかなければならない。考える力、

小さな灯火を大切に

今回のシリーズを進めていくにつれて、音楽の構成要素に向ける意識が、よりはっきりした形を成してきたことは、興味深い感覚だったかもしれない。何気ない単純なリズムに意味があり、どこにもありそうな音の移動や、やさしく処理できる音形に、ちゃんとそこに置かれた理由がある。ベートーヴェンはそこにそれを置かねばならなかったから置いたのだ。そこに置くべき必然性があったから、そうしたのである。それを決めるためにどれだけの考察と呻吟があったか、それを垣間見られただけでも、今回のシリーズの意義があったと思う。今回は特に私からのお願いで、開演前にその日の演目の背景などをお話しさせていたたく、プレトークの時間を設けた。このために、彼の生涯や交友関係、当時の人々の生活スタイルなど、作品以外のことに関心を向けられたことも、彼の音楽的なアイディアをより深く考えて行く助けになったと思う。

感じようとする心、精神的にも肉体的にも「きつい」と思った時にその認識を別の方向に向け、新しいエネルギーに転換して行く心や体の使い方など、その人持有的な能力をすべて使って作り上げて行くものだ。その作業の集積そのものが、その人の能力となっていく。厳しい見方をすれば、焦点の合わせ方が少しずれただけで、大きな時間とエネルギーのロスが生じる。もちろんそれを許容していても、目的は達せられない。何でもない箇所を使いを確定すること、短いフレーズの流れ一つを読み取ることに、しっかりと必要な意識を向けて、より良い答えを導き出さなければならぬ。一つずつの作業だけとってみれば、なんでもなようなことも、その膨大な集積を最高の精度を維持しながら行ない切ること、そしてそこに独自の味としての適切な表現を織り込んで行くことは、決して楽な道のりではない。

よく思うのだが、この工程は料理作りに似ている。材料の選定、仕入れから始めて、下ごしらえ、火のいれ方、味の

2011年3月11日に起こった突然の悲劇によって、この静かな街も、まほらホールも大きな影響を受けた。多くの人々が深い悲しみと無力感、そしてある時はやり場のない怒りや底知れぬ不安を感じたことと思う。そうした体験や感覚を、私たちも含めて、長い時間をかけてお互いに分かち合っていくしか、この困難な状況を乗り越えて行く方法はない。私たち一人ひとりは無力かも知れないが、音楽はその一人ひとりの心の中に、前向きになれる小さな火を灯すことのできる一つの道具だ。そのことを忘れずに、これから進んで行きたいと思う。



支えてくださった三春町のみなさんと最終公演記念パーティで
(写真提供 三春交楽館運営協会)
※ 全公演をライブ録音したCDが順次制作されています。最新情報をP68で紹介しています